

コンピテンシーを育成する学びをいかに構想するか ～パフォーマンス課題「私たちは原爆投下をどのように記憶すべきか」を事例に～

野沢温泉村立野沢温泉中学校 篠原 敏紀

1、歴史教育における「コンピテンシー」(「資質・能力」・「学びに向かう姿勢・人間性」)とは？

◆「歴史的思考力(永松(2017))」とは？(歴史の「見方・考え方」にも通底する)

- i、様々な資料から、その内容を科学的に適切に読み取る力
- ii、因果関係や、時間の推移に伴う変化等を論理的に考察し、その意義や意味を解釈する力
- iii、多面的・多角的に考察し、複数の解釈に気付き、その根拠や論理を説明する力
- iv、社会的事象の意義や意味を総合的に表現し、新たな課題を見つける力

①「原爆投下」という多面的・多角的な見方が可能な題材の設定

②他国の立場、世代を超えた立場からの意見交流の場の設定(1時)

③「原爆資料館のリニューアル」という現代的諸課題への視点(2時)

MQ:私たちは、原爆投下をどのように記憶すべきか

2、授業実践より (第1時では、アメリカ側と日本側から原爆投下に関する異なる2つの歴史的ナラティブに触れて討論をした)

第2時

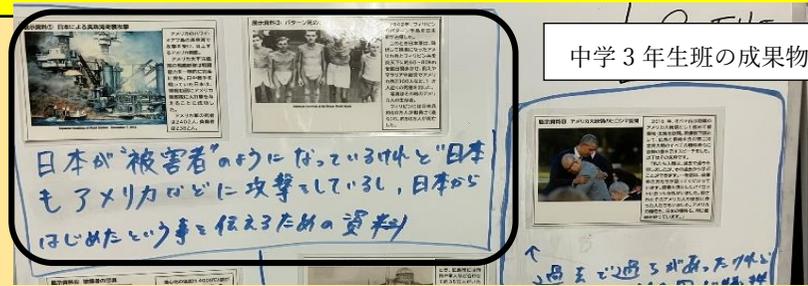
パフォーマンス課題:「日本政府は、博物館の原爆投下に関する展示品として、どのような写真をどのような目的で展示すべき(すべきでない)なのか」

グループで、写真①～⑩の中から4つを選び、選んだ理由、選ばなかった理由、迷ったことを書き、各班 1～2 分で発表

各班の中で意見が多く出た部分(議論の争点となった部分)

- 日本側からの視点で歴史を語ってしまっているのか
- ①両国の立場から「原爆投下」という集合記憶を再構成しようとする姿
→日本側、米側両者の視点が反映できるような資料選択へ
- ②国家の枠を超えた歴史を大切にする生徒の姿
→原爆投下に関わる人々の生き方に着目した資料選択をする生徒

解釈によって歴史像が変わることを認識しつつ、より公正・中立な歴史記憶を目指して、生徒同士で主体的対話的に考えていく姿



中学3年生班の成果物

中学生と高校生との間で意見が違った部分(議論の争点)

- 「被爆再現ろう人形」を選ぶかどうか
- ①インパクトがある「被爆再現ろう人形」を展示物に選んだ中学生
- ②客観性に乏しい「被爆再現ろう人形」を展示物に選ばなかった高校生
⇒歴史を構成する資料としての信憑性や価値への視点

実際に資料館が直面している「実物展示主義」という現代的な課題に、協調学習を深める中で、自ら問いを立て、接近していき、本質に迫っていく生徒集団の姿



高校生班の成果物

歴史的思考力の育成

- 多面的・多角的な見方によって歴史を見る眼の獲得
→どう記憶していくべきか悩み、難しさを実感する生徒、公正(客観的・俯瞰的)な歴史を築くことの難しさに気づく生徒
- 一人一人の歴史観(a history)があっという間のことへの気づきと、その見方を伝えあい尊重していく態度の獲得
→歴史の「広がり」と現代的諸課題を捉え、考えていく際の力となったと実感する生徒